

第10話 神功皇后の三韓征伐

熊襲がまた叛く。神功皇后は非常なご決心を以って、この熊襲の後押しをしている新羅を征伐された。続いて百済も高句麗も降って、三韓は悉くわが属国となった。

日本武尊が身を犠牲にまでされてお骨折になったおかげで、西も東も遠くまで平らいで、世の中はよく治まるようになったので、次の第13代成務天皇の御代には、山や河の形に依って国や県の境を定めて、それぞれ国造や県主を新たに任命され、村には稻置（今の村長のような人）を置いて、租税の世話をさせられたので、地方の政治も大いに整い、大和の朝廷のご威光もますます盛んになった。

熊襲また叛く

ところが、第14代仲哀天皇の御代になって、熊襲がまた叛いたのです。仲哀天皇は日本武尊の御子で、叔父の成務天皇から位を受けたのですが、父尊と同じように武勇な方でしたから、すぐにご自分で征伐なさるために兵を率いて都をお立ちになった。皇后を共に先づ長門（山口県）の豊浦の宮においでになって、そこでいろいろの準備をなされて九州へ渡り、筑前（福岡県）の香椎の宮にましまして、賊を討つに就いての軍議をお凝らしになった。

この時、ご一緒でした皇后は、あの名高い神功皇后ですが、熊襲が斯う度々叛くのは、朝鮮の新羅が後押しをしているからに違いないとお考えになり、「先づ新羅をお討ちになれば、熊襲は攻めずとも自然に鎮まるであります」と天皇に申し上げました。

といいますのは、その頃、朝鮮半島には高句麗、百済、新羅という三つの国があり、日本ではこれを三韓と呼んでいた。中でも新羅は勢いが最も盛んで、常に隣国の百済などをいぢめていたし、わが九州にも一番近かったので、野蛮で獐猛な熊襲をそそのかすくらいの事はしかねないと思われたのでしよう。

しかし仲哀天皇は、そうお考えにはならなかったのか、それとも、先づ国内の賊を平らげて後に、新羅を懲らしめになろうとされたのか、皇后のお言葉はお用いにならずに、熊襲の征伐をお始めになった。

ところが、不幸にして、間もなく仲哀天皇はその軍中で俄かにお崩れになりました。

新羅征伐

この大事件の突発には、さすがに皇后も非常に驚かれたが、もしこの事が世間に広く知れ渡ると、味方の元気は衰えるであろうし、賊はいよいよ乱暴を働くようになろうと思し召した。

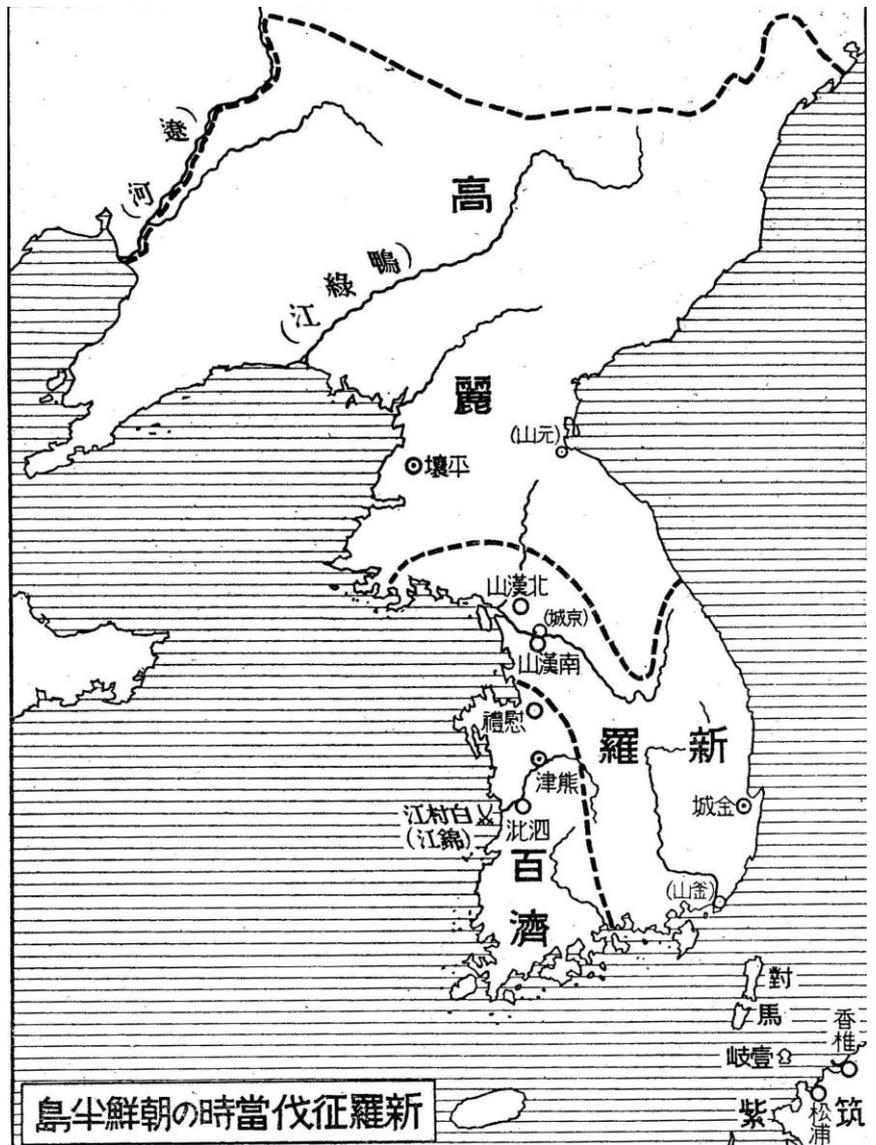
深いお嘆きの中にも、強くお心を引締められて、大臣の竹内宿禰とご相談の上、天皇の遺骸は一先づ長門の豊浦の宮にお遷し申して、天皇がお崩れになったことは暫く秘密にして置き、一方、熊襲の方へは吉備鴨別という将を遣わして征伐を続けさせられながら、ご自分はおもっぱら新羅征伐の用意をされた。

その時、皇后は御懐妊中でしたが、国のためにはその身重も厭いがなく、髪を男のように角髪にお結になり、凛々しい扮装をなされ、群臣に宣うたのです。

「軍をおこすのは国の大事であつて、^{かるがる}軽々しくなすべきではないが、今、^う討たなければならぬことに就いては、^{ばんじ まえたち まか}万事はお前達に任せるけれども、^も若し事がうまく行かない時に、罪がお前達に在ることになるのは^{はなは き}甚だ気の毒だから、私は女の身だが^{しばら}暫く男の姿をかりて、^{すがた ぐん ひき かみ}軍を率い、上は神々のご加護を蒙り、^{か ご こうむ しも たす}下はお前達の助けに依って、^よ海の外の国を討とうと思ふのである。

事がうまく行けば^{てがら}手柄はお前達のものだが、若しうまく行かない時には、^{つみ わたしひと}罪は私独りにある。その積りで、よくよく^{いくさ ひょうぎ}軍の評議をするように」

というお言葉で、その^{ことば}固い決心をお示しになった。これを聞いた^{しめ}一堂の者が^{かんぶん}感奮したのはいうまでも無いことです。



新羅征伐当時の朝鮮半島図

「謹んで仰せのままに、一同、一生懸命に働いて、国の為^つに尽くしましょう」とお答え申し上げた。

三韓の降伏

そこで皇后は諸国に令を下して、船を集め、兵を整え、威風堂々と新羅にお向かいになった。数百の軍船は、まるで風の神でもお助け申したように、帆に折からの順風を孕んで、艚も櫂も用いずに、みるみるうちに新羅に着きました。

その勢いは余程盛んであったと見えて、その海辺に碇をおろしたわが軍船から日にひらひらと旗が輝き、鼓や笛や関の音が山を動かして起こるのを遥かに望んだだけで、新羅の王の波沙寐錦は既に大いに恐れて、

「聞けば東の方に神国があつて日本といい、天皇と申す聖の君がましましてご支配になっているということだが、これはきっとその神国の神兵であろう。逆も敵うものではない」

と、白旗をかかげて皇后のお船の前に参って、

「今より後、永くご支配に従って、年ごとに貢物を奉ります。たとえ太陽が西より出で、鴨緑江の水がさかしまに流れ、河の小石が天に昇って星となることありましても、この誓いは変えません」

第10話 神功皇后の三韓征伐

と申し上げた。

この時、味方の中には、「新羅王を殺してしまえ」といった者もあったが、皇后は「降る者を殺すのはよろしくない」と静かに仰せられて、新羅の王の降参をお許しになりました。

やがて、皇后がご凱旋になる時に、波沙寐錦は王族の一人を人質としてお供させた上に、金銀や綾錦、薄絹などを80艘の船に積んで貢物としましたが、これが例になって、その後も新羅の王は年毎に船80艘の貢物を奉ることとなった。

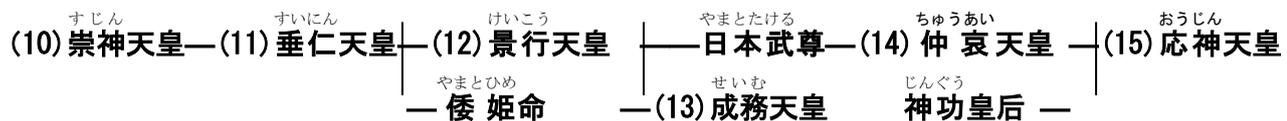
こうして朝鮮で最も勢力のある新羅が既に日本に降ったということを知ると、その隣国の百済も高句麗も続いてわが威徳を慕って降り、新羅と同じ年毎に貢物を奉ることとなった。

実に神功皇后は戦わずして三韓を悉く属国となされたのです。それで、後にはこの新羅の征伐を三韓征伐とも言うようになりました。

わが国と朝鮮との関係

なお序にいつておきますが、元来、朝鮮は、前にも述べたように、神代に素戔嗚尊がすでにその南部をご支配になったこともあり、崇神天皇の御代には任那に日本府が置かれた。それが今度のご征伐で、半島の全部が日本に完全に属しました。

その後いろいろの変遷があつて、一度この密接な関係が絶え、朝鮮は別に一国になって独立していましたが、明治になってまたわが国に併合されました。すなわち、遠い昔にかえって再び元通りになり、これは、太平洋戦争での日本の敗戦まで続きました。



(第10話 神功皇后の三韓征伐 終わり。 次は前頁に戻り、第11話 文物の伝来へ)